

Z会東大進学教室

直前早慶大世界史

【3回目】



問題

【1】

解答

問1 1 20 2 14 3 19 4 25 5 17 問2 2 問3 李斯
問4 3 問5 大義名分論 問6 陸九淵 問7 文字の獄 問8 公羊学派

解説

- 問1 1 戦国時代末期の前3世紀に活動した荀子は、人間の本性を悪とする性悪説をとり、社会秩序を保つために礼が必要であるとした。この考えは法家の説に通じるものがあり、彼の弟子には、ともに法家として名高い韓非・李斯がいる。
- 2 孔穎達らが唐の太宗（位626～49）の命で作成した『五経正義』は、五経の註釈書で、科挙のテキストにされた。この書によって、それまであった五経についての多様な註釈が統一されたが、一方で、儒学思想の固定化・形式化を招いた。
- 3 北宋の儒学者周敦頤は、仏教や老荘思想の宇宙観を取り入れ、宇宙の根本原理と人間の道德の関係を追究した。彼の説は程顥・程頤兄弟に引き継がれ、朱熹によって大成された。
- 4・問6 朱熹と同時代の南宋の儒学者陸九淵は、人間の心の中に理がある（心即理）と主張した。明の王陽明はこれを発展させて、知行合一を唱え、心の内にある理がそのまま行動となって現れることを求め、知識偏重の朱子学を批判し、実践を重視する陽明学を確立した。
- 5 明末の儒学者である黄宗義・顧炎武は、明の滅亡後はともに復明運動に関与したが、結局、復明はならなかった。清は両者の学識を高く評価し、官職に就くことを求めたが、彼らはこれを拒絶して研究に没頭した。彼らは古典の実証的な研究の上に立って、現実の政治・社会に有用な学問を追求し、考証学の基礎を築いた。
- 問2 戦国時代中期の孟子は、人間の本性を善とし、王が徳を備え、仁義の政治（王道政治）を行うことによって秩序が回復されると説いた。
- 問3 秦は前4世紀に孝公（位前361～前338）が法家の商鞅を任用し、郡県制の導入など改革を行った。その後も秦は法家思想の信賞必罰を軸に、富国強兵を進めていった。前3世紀の秦王政（位前247～前221，始皇帝；位前221～前210）の時代には法家の李斯を採用して中国統一を進めた。中国統一後、始皇帝は李斯の建議によって、思想・言論を統制するために焚書・坑儒を行った。
- 問4 前漢の初期には、宮廷内では道家の老荘思想の影響が強かったが、第7代の武帝（位前141～前87）は、儒学者の董仲舒を重用し、彼の進言によって儒学を官学化して国家統治の理念としようとした。また、五経と総称される『詩経』『書経』『易経』『春秋』『礼記』を教授、普及する五経博士を置いた。さらに、地方から儒教的素養を身に付けた有徳者を中央に推挙させ、官吏として登用する郷挙里選を実施した。その後、混乱期を收拾して後漢を建てた光武帝（位後25～57）も儒学を重んじ、儒教思想に基づく統治を確立した。しかし、官学化によって、儒学は思想・学問的な面での創造性を失い、古典の註釈を主とする訓詁学に没頭するようになった。訓詁学は後漢の鄭玄によって大成された。なお、『五経大全』は、明代に永楽帝（位1402～24）の命によって編纂された書物である。
- 問5 朱子学では、大義名分論が重視された。大義名分論では、君・臣ともその名にふさわし

く行動し、名と分を一致させることが唱えられ、君臣の別を強調した。

問7 清は中国本土の統治に際し、科挙の実施、満漢併用制（満漢偶数官制）、中国文化の尊重、大編纂事業などの懐柔策を採った。一方で威圧策も併用し、満州族の風俗である辮髪を中国人の男子に強制したり、反清的な書物を禁書としたり、反清的な文書を著したとして文字の獄と呼ばれる弾圧を行ったりした。

問8 孔子が編纂した『春秋』は魯の国の年代記であり、その註釈書の1つが『公羊伝』である。『公羊伝』は厳しい政治批判を展開した書物で、これを正統とする一派を公羊学派と呼ぶ。清末の康有為や梁啓超らは、『公羊伝』を基にして政治改革を主張し、変法運動を展開した。

【配点】（計12点）

問1 各1点 問2～問8 各1点

【2】

解答

1 ④ 2 ② 3 ④ 4 ① 5 ① 6 ① 7 ③ 8 ②
9 ②

解説

1 A 戦国時代の詩集としては、黄河流域の民謡を中心に集めた『詩経』と、南方で作られた詩歌を集めた『楚辞』が有名である。楚の屈原の作といわれる詩が収められているのは、『楚辞』である。

B 『春秋』は孔子が編集したとされる魯の年代記で、中国最古の詩集は『詩経』である。

2 A 陶淵明（陶潜）は東晋から南朝の宋にかけての詩人で、東晋の官吏となったものの、束縛されるのを嫌って故郷へ帰った。彼は、この帰郷の際に有名な「帰去来辞」を詠んだ。

B 『文選』は、古来の詩と散文を編纂した詩文集で、梁の昭明太子によって編纂された。

3 A 唐代には、律詩や絶句などの唐詩が盛んに作られるようになり、唐代文学の中心的地位を占めた。代表的詩人には王維や“詩仙”と呼ばれる李白，“詩聖”と呼ばれる杜甫などがある。夏珪や馬遠は南宋の院体画の代表的な画家である。

B 安史の乱（755～63）で反乱軍側の捕虜となり、その時に「春望」を作ったのは、杜甫である。白居易は9世紀前半に活躍し、玄宗（任712～56）と楊貴妃の恋愛を歌った「長恨歌」などで知られる。

4 A 詞は、楽曲に合わせて歌う歌詞で、士大夫から庶民にまで広がり、宋代に発達した。

B 雑劇は、宋代に歌とせりふとしぐさによる歌劇として成立した。北曲と南曲に分かれたのち、北曲は元代に元曲と呼ばれて盛んになった。

5 A 唐宋八大家の1人に数えられ、「赤壁の賦」などの作品で知られる北宋の詩人蘇軾（蘇東坡）は、諸官を歴任した政治家でもあり、王安石の新法に反対した。

B 唐宋八大家の1人に数えられ、『新唐書』や『新五代史』などの正史の編纂も行った欧陽脩は、古文復興に努めたほか、政治家としても活躍したが、王安石の新法に反対して退官した。

6 A 明代には、庶民向けの文化が発達し、講談や劇などが農村などでも演じられた。また、元代に原型が成立し、明代に羅貫中によって著された『三国志演義』や、元代の施耐庵によっ

て著され、明代に羅貫中によってまとめられた『水滸伝』などが、民衆文学として多くの読者を得た。

B 大都（現在の北京）を中心に発達した元曲（北曲）に対して、江南で発達した戯曲を南曲といい、その代表作には『琵琶記』がある。

- 7 A 『古今図書集成』は、清の康熙帝（位 1661～1722）の命で編纂が開始され、雍正帝（位 1722～35）時代の 1725 年に完成した。明の万曆帝（位 1572～1620）は、治世の初めは張居正を登用して王朝を建て直したが、のちに宦官を重用して政治を乱し、明の衰退を促進させた。

B 『四庫全書』は清の乾隆帝（位 1735～95）の命で編纂された大叢書で、1781 年に完成した。古今の書物を経・史・子・集の 4 部に分類して編集した。

- 8 A 『聊齋志異』は、清代に蒲松齡によって著された短編怪異小説集である。『紅樓夢』は、清代に全体の 3分の2を曹雪芹によって、残りは高蘭墅によって著された恋愛悲劇を主題とした長編小説である。

B 清代の代表的な戯曲には、唐の玄宗と楊貴妃の恋愛を主題とした『長生殿伝奇』や、明末の文人と名妓との悲恋物語をテーマとした『桃花扇伝奇』などがある。

- 9 A 白話運動は、1917年に胡適が「新青年」に「文学改良芻議」を発表し、白話文学を提唱したことによって始められた。

B 1915年に上海で「青年雑誌」を創刊し、翌年これを「新青年」と改名したのは陳独秀である。李大釗は「新青年」の編集に参加した人物である。彼はマルクス主義思想家でもあり、陳独秀とともに中国共産党の創設に尽力した。

【配点】（計 18 点）

1～9 各 2 点

【3】

解答

1 孫権 2 司馬睿 3 天京

問① 文選 問② 法顯 問③ 蘇湖熟すれば天下足る 問④ 王安石

問⑤ 靖難の役 問⑥ c 問⑦ 孫文

解説

1 呉を建国した孫権（位 222～52）は 229 年、現在の南京に都を定めた。当時の呼称である建業とは、“帝王の大業を創建する”の意という。

2 司馬睿（位 317～22）が建国した東晋は君主権が弱く、政争が相次いだ。貴族文化が栄えた。

3 上帝会を組織した洪秀全は 1851 年に金田村で挙兵して太平天国を建設し、1853 年には南京を天京と改称して都を置いた。

問① 昭明太子は梁の武帝（位 502～49）の皇太子で、周から梁に至る時代の優れた詩と散文を集めた『文選』を編纂したが、若くして死去した。父の武帝は熱烈な仏教信者で、200 に上るといわれる多数の壮大・華麗な仏教寺院を建て、財政難を招いた。

問② 法顯は 399 年に長安（現在の西安）を出発して陸路でインドを訪れ、各種の仏典を経て、

海路で412年に帰国した。帰国後は仏典の漢訳を行い、旅行記である『仏国記』を著した。

問③ 宋代の長江下流域の稲作の発達、新田開発による耕地面積の増加、占城稲の普及な稲の品種改良、農器具の改良・普及、稲麦二毛作などによってもたらされ、“蘇湖熟すれば天下足る”といわれるまでになった。

問④ 王安石は現在の江西省臨川の出身で、1042年、科挙に合格し進士となったが、家族を養うため実収入の多い地方官を歴任した。1067年、神宗（位～1085）が即位すると、王安石の才能と抱負を見込んで江寧府の知事に任じ、翌68年、中央に召して新法の立案に当たらせ、70年に宰相に任じて新法を実施させた。

問⑤ 明を建国した洪武帝（位1368～98）は他人を信用できず、功臣・旧友の多くを肅清し、自らの皇子たちを各地の諸王に封じた。皇太子に先立たれた洪武帝の死後、後継者に指名されていた皇孫の建文帝（位1398～1402）は、諸王の領地を強制的に削減して中央集権化をはかったが、叔父の燕王が反乱を起こし、首都を攻略して帝位を奪った（靖難の役）。こうして即位した永楽帝（位1402～24）の下で、政治の中心は南京から彼の根拠地である北京に移り、やがて北京が正式な都となった。

問⑥ アヘン戦争の結果、1842年に結ばれた南京条約では、没収されたアヘンの賠償金600万ドルの支払いは定められたが、アヘン貿易そのものについては触れられなかった。アロー戦争中の1858年10月に結ばれた天津条約を補充した北京条約（1860）により、アヘン輸入の公認が取り決められた。

問⑦ 辛亥革命により1912年1月1日に南京で中華民国が建国されると、孫文が臨時大総統となったが、この政権は非力だった。これに乗じた北洋軍閥の袁世凱は革命政権と取り引きし、2月に宣統帝（位1908～12）を退位させて、翌月、臨時大総統に就任した。孫文は辞任し、臨時政府は北京に移った。

【配点】（計10点）

1～3 各1点 問①～問⑦ 各1点

【4】

解答

- A シャー=ナーメ B アラベスク C アルハンブラ D イブン=シーナー
E 錬金術
- (1) タラス河畔の戦い (2) スーフィー (3) イブン=ハルドゥーン
(4) ミナレット (5) タージ=マハル (6) ウマル=ハイヤム
(7) フワーリズミー (8) コルドバ

解説

A フィルドゥシー（940頃～1025）によって11世紀初めに完成されたイランの国民的叙事詩は、『シャー=ナーメ（王の書）』である。『シャー=ナーメ』は、イスラーム以前のイランの神話・伝承や、ササン朝までの諸王の英雄物語を扱っている。

B イスラーム世界における、アラビア文字や、植物の葉や茎などを図案化した幾何学的な装飾文様をアラベスクという。アラベスクは、モスクなどの壁面や、工芸品などに用いられた。

- C イベリア半島ではイスラーム諸王朝の支配下で独自の文化が発展した。建築では、イベリア半島最後のイスラーム王朝となったナスル朝（1232～1492）が首都グラナダに建設したアルハンブラ宮殿などが名高い。
- D アラビア医学を体系化して『医学典範』を著したのは、医学者のイブン=シーナー（980～1037）である。この書はのちにラテン語に翻訳され、12～16世紀のヨーロッパ医学でも重用された。
- E 卑金属から貴金属（とくに金）を作り出そうという錬金術は、中国・ヨーロッパ・イスラーム世界などで古くから試みられた。錬金術によって、化学変化が発見され、実験道具・実験方法などが考案され、これらが基礎となって化学が発達した。
- (1) アッバース朝は750年に成立し、その翌年に中央アジアで戦われたタラス河畔の戦いで、唐の高仙芝が率いる軍隊に圧勝した。この時イスラーム軍の捕虜となった中国人の中に紙すき職人がいたことから、イスラーム世界に製紙法が伝播したとされる。
- (2) イスラーム教の教義の専門化と形式化に対して、修行によって神との一体感を得ようとする神秘主義思想が現れ、10世紀以降民衆の支持を獲得するようになった。その修行者は、羊毛の粗衣（スーフ）をまとい、禁欲と清貧のうちに修行を行ったことからスーフイーと呼ばれた。また、彼らの思想はスーフイズムと呼ばれる。
- (3) 14世紀後半に『世界史序説』を著したのは、チュニス生まれの歴史家イブン=ハルドゥーン（1332～1406）である。彼は、『世界史叙説』の中で、年代記形式の叙述を行うのではなく、都市と遊牧民の関係を中心に歴史発展の法則性を論じた。
- (4) イスラーム教の礼拝の場であるモスクには、高い所から人間の声によって礼拝の開始を知らせるためのミナレット（光塔）が付随している。
- (5) ムガル帝国第5代皇帝シャー=ジャハーン（位1628～58）は、妃のムムターズ=マハルの死を悼んで、アグラの東にタージ=マハルと呼ばれる墓廟を建てた。白大理石を基調に造られたタージ=マハルは、インド=イスラーム建築の1つである。
- (6) セルジューク朝時代に行われたジャラリ暦の制定には、イラン系天文学者のウマル=ハイヤーム（1048～1131）が参加した。彼は詩人でもあり、四行詩集の『ルバイヤート』などを著した。
- (7) 9世紀にアラビア数学を確立し、代数学の基礎を固めたのは、アッバース朝のバグダードで活躍したフワーリズミー（780～850頃）である。
- (8) 後ウマイヤ朝（756～1031）の首都は、スペインのアンダルシア地方に位置するコルドバである。王朝の繁栄に伴って、コルドバは、10世紀頃にはバグダードに匹敵する大都市の1つとなった。また、ヨーロッパとイスラーム世界の接点であるイベリア半島に位置した後ウマイヤ朝では、バグダードなどからイスラーム世界の学術や芸術がもたらされ、書物のラテン語訳も進んだため、中世ヨーロッパの学問に大きな影響を与えた。

【配点】（計26点）

A～E 各2点 (1)～(8) 各2点

【5】

解答

問1 c 問2 a 問3 A-f・l B-g・m C-d・j D-e・i
問4 c 問5 d 問6 c・e 問7 c・d 問8 a 問9 a・e
問10 e 問11 f 問12 ワフド党 問13 d 問14 f

解説

紀元前～第二次世界大戦後にかけての、エジプトに関する問題である。地域の特性上、イスラーム史の出題が多くなるが、ローマ帝国以前や、19世紀以降のヨーロッパ諸国の進出も頻出テーマなので、全時代を通じての復習の手掛かりにしてもらいたい。

問1 ①～⑤のファラオを時代順に並び替えると、②メネス王（位前2925頃）→④トトメス3世（位前16世紀末頃～15世紀半ば）→③アメンホテプ4世（位前1379頃～前1362頃）→⑤ツタンカーメン（位前1361頃～前1352頃）→①ラメス2世（位前1304頃～前1237頃）となる。従って3番目のファラオは③アメンホテプ4世であり、アメンホテプ4世の治績としては、「c テル=エル=アマルナへの遷都を実施した」が正しい。「a ヒッタイトとカデシュの和約を締結した」のはラメス2世、「b アトン信仰を廃止した」のはツタンカーメン、「d テーベへの遷都を実施した」のは中王国時代の出来事で、「e エジプト新王国の領土が最大となった」のはトトメス3世の治世である。

問2 アレクサンドロスは、ギリシアから小アジア（トルコ）へ進撃する際にグラニコスの戦い（前334）でペルシア軍を撃破し、イッソスの戦い（前333）にも勝利して、地中海東岸（ヨルダン）を通過してエジプトへ入った。その後アルベラの戦い（前331）でアケメネス朝ペルシアに壊滅的打撃を与えた後、メソポタミアのバビロンに拠点を置いた。そこからさらに東方へ遠征し、イラン～インダス川流域～中央アジア（アフガニスタン、ウズベキスタン）に至る広大な地域を征服した。その後、部将の反対を受けてバビロンに引き上げ、アラビア遠征を計画中にアレクサンドロスは急死する。従って、アラビア半島南部に位置するaのイエメンには遠征していないことになる。このルート、征服地に関しては必ず地図で確認しておくこと。

問3 A アルキメデスは、シチリア島のシラクサ生まれの科学者で、浮体の原理を発見したことで知られる。彼が改良した兵器は第二次ポエニ戦争においてローマ軍を大いに悩ませたが、その戦争中にローマ軍兵士によって殺害された。

B エラステネスは、北アフリカのキレネに生まれ、プトレマイオス3世に招かれてムセイオン（図書館）の館長を務めた。その著書『地理学』の中で、夏至の日に行われる影を利用して、地球の周長を計測したことは有名である。

C エウクレイデスは、ギリシアの数学者でアレクサンドリアで活躍し、その著作『原論』で幾何学に系統的・理論的体系を与えた。16世紀末頃に明を訪れたイエズス会宣教師マテオ・リッチが、このユークリッド幾何学を中国語に翻訳し『幾何原本』として発表したのが、リッチと共に翻訳作業を行ったのが徐光啓である。

D アリスタルコスは、ギリシアのサモス島生まれのギリシア天文学者であり、太陽と恒星は同一の中心点を持つ球面上にあって不動であり、地球は太陽を中心にして円軌道を描いて回転するという太陽中心説（地動説）を唱えた。

- 問4 ギリシア沖である。地中海沿岸で行われた海戦（具体的にはアクティウムの海戦、プレヴェザの海戦、レバントの海戦、トラファルガーの海戦）の位置は地図問題でも頻出なので、もう一度地図で確認しておくこと。
- 問5 イスラーム教徒がカイルワン市を北アフリカに建設したのはウマイヤ朝時代のことである。カイルワン市は、ミスルと呼ばれる軍営都市であったこともおさえておきたい。aとbとeは第2代カリフのウマルの時代、cは第3代カリフのウスマーンの時代の出来事である。
- 問6 まずcのカージャール朝に関して、19世紀にイランがイギリスとロシアの侵略の標的と成ったことが最重要テーマになるため、シーア派王朝であることが意外な盲点となる。イラン系王朝にシーア派が多いことをもう一度確認しよう。eのサファヴィー朝がシーア派であることは基本事項である。さらに一歩突っ込んで、シーア派でも穏健派の十二イマーム派であったことも触れておきたい。一方でシーア派の過激派としてはイスマエール派があり、エジプトのファーティマ朝が国教としていたことも、難関大で出題される可能性がある。
- 問7 アイユーブ朝の建国は1169年、ウォルムス協約（ヴォルムス協約）の締結は1122年、カラ=キタイの建国は1132年、ワールシュタットの戦いは1241年、マグナ=カルタの成立は1215年、プランタジネット朝の成立は1154年。なお、カラ=キタイの建国の年代が直接問われることはあまりないが、遼が靖康の変（1126～27）の前に金により滅亡し、その残党が中央アジアへ移動して西遼（カラ=キタイ）を建国したことを考えれば、おおよその年代の見当をつけることができるはずである。
- 問8 フラグは、1258年にアッバース朝を征服した後、マムルーク朝への遠征を行っているが、1260年にマムルーク朝第5代のスルタンであったバイバルス（位1260～77）によって撃退された。バイバルスは、第6回十字軍遠征を迎え撃ち、フランス王ルイ9世（位1266～70）を捕虜にした人物でもある。バトゥ、オゴタイ、チャガタイ、フビライの4人は、マムルーク朝と交戦したことはない。
- 問9 マムルーク朝を征服したセリム1世の治世は1512～20年である。
- a ムラト1世はイエニチェリの創始で知られるスルタンで、その治世は1362～89年。
 - b アブデュル=メジト1世は、19世紀にタンジマートでオスマン帝国の近代化を試みたスルタンで、その治世は1839～61年。
 - c アフメト3世は、チューリップ時代と呼ばれる西欧趣味が流行した時期のスルタンで、その治世は1703～30年。
 - d スレイマン1世は、オスマン帝国最盛期のスルタンで、16世紀前半のヨーロッパを恐怖に陥れた。治世は1520～66年。
 - e メフメト2世は、コンスタンティノープルを攻略し東ローマ帝国を滅ぼしたスルタンで、治世は1444～46年、1451～81年（一時期父ムラト2世が復位している所以で治世が二期にわたる）。
- 問10 第2次エジプト=トルコ戦争では、イギリス・ロシア・プロイセン・オーストリアがオスマン帝国を支持し、一貫してエジプト支持を貫いたフランスは外交的に孤立することとなった。この外交を主導したのがイギリス外相パーマストンであるが、その背景としては①エジプトの強大化に対する警戒、②フランス（ティエール内閣）の対英強硬外交、がある。また、イギリスが戦争後に、ロシアとオスマン帝国が締結していたウンキヤル=スケレッシ条約を破棄

させたこともイギリス外交の勝利と言われる所以である。

問 11 a ウラービー=パシャが陸軍大臣として新憲法を発布したウラービーの反乱が勃発したのは1881年のことであり、これを鎮圧したイギリスが、1882年にエジプトを事実上保護国化した。

b アフガーニーの弟子の名前が誤りで、正しくはムハンマド=アブドゥフである。やや細かい事項であるが、ムハンマド=ブン=サウードが18世紀半ばにネジド地方でワッハーブ王国を建国した人物であることが定着できていれば、誤りであることは想像できる。

c チュニジアが誤りで正しくはアルジェリア。アルジェリアを当てはめれば、すべて文の内容は正しくなる。

d サレカット=イスラームは、インドネシアでオランダ支配に対抗して結成された、イスラーム教徒の民族運動団体である。

e 文末の「第二次世界大戦後まで両者が対立し続けた」というくだりが誤り。国民会議派と全インド=ムスリム連盟は、第一次世界大戦中の1916年にラクナウ協定を結び両者の協力を約しており、また戦間期には国民会議派のサティヤグラハと共闘する形で、全インド=ムスリム連盟はキラーフット運動と呼ばれる反英運動を展開した。

問 12 ワフド党は、パリ講和会議へのエジプト「代表団」参加運動がもととなって結成された。スローガンは「エジプト人のためのエジプト」で、サアド=ザグルールを指導者として大衆の支持を得て、1924年に政権を獲得した。

問 13 第二次世界大戦中の連合国首脳会議の出席者とその会議内容は基本事項として定着させておかなければならない。

大西洋上会議 1941年8月	ローズヴェルト チャーチル	大西洋憲章を発表し平和機構の再建を示唆
カサブランカ会議 1943年1月	ローズヴェルト チャーチル	①シチリア上陸作戦を決定 ②枢軸国に対する無条件降伏を要求
カイロ会議 1943年11月	ローズヴェルト チャーチル 蒋介石	対日処理の方針を決定
テヘラン会議 1943年11～12月	ローズヴェルト チャーチル スターリン	①ノルマンディー上陸作戦の決定 ②ソ連の対日参戦の約束
ヤルタ会議 1945年2月	ローズヴェルト チャーチル スターリン	①国連憲章の決定、安保における大国の拒否権の承認 ②戦後のドイツの4国管理、非武装化 ③ソ連の対日参戦の確認。代償として千島・樺太の譲渡
ポツダム会議 1945年7～8月	トルーマン チャーチル（途中からアトリー） スターリン	①ドイツ敗戦処理を協議 ②ポツダム宣言で日本に無条件降伏を勧告

問 14 正解は f。すべてカーターの在任中（1977～81）に起きた出来事である。a～dは合衆国の政治に関連がある事項。

- a ニカラグア革命は、1979年、ニカラグアで専制政治を行っていたソモサを、サンディニスタ民族解放戦線（F S L N）が追放して、左翼政権が成立した事件。のちに、アメリカの援助を受けた反政府右翼ゲリラ「コントラ」との内戦に発展し、1990年2月にサンディニスタ政権は崩壊した。後継には、親米派のチャモロが大統領に就任した。
- b ソ連のアフガニスタン侵攻は1979年。ソ連は1979年に成立した急進的なアミン政権を廃し、穏健派のカルマル政権を樹立するために軍事介入を行ったが、米・パキスタンの支援を受けた反政府ゲリラとの抗争が泥沼化した。ソ連は1988年に撤退を決定し、翌年撤退を完了した。
- c イランのアメリカ大使館人質事件は、1979年11月、イラン革命後のイランが合衆国の内政干渉を排するために、ホメイニ派が合衆国大使館に乱入・占拠した事件。カーター政権の強引な人質救出作戦は失敗し、両国の関係が悪化した。
- d 第2次戦略兵器制限交渉（S A L T II）の調印は1979年6月。第1次では戦略ミサイルの数量を制限し、第2次では戦略兵器の運搬手段の総数を取り決めた。しかし、同年のソ連のアフガニスタン侵攻により米ソ関係が悪化したため、合衆国議会が条約に批准せず発効することはなかった。
- e ユーゴスラヴィア大統領ティトーの死は1980年。合衆国の政治とは直接的な関連はないが、この年代は押さえておきたいところである。

【配点】（計34点）

問1～問14 各2点



会員番号	
------	--

氏名	
----	--